

体験レポート

やる気応援奨学金

『やる気応援奨学金』は、法学部学生で、何かチャレンジしよう、またはチャレンジした結果、すごい実績を上げた、などやる気をもった学生に対して、最高一〇〇万円の奨学金を給付しようというものです。

今回は、この奨学金を利用して海外へ飛び出していった二人の学生さんから寄せられた体験レポートを紹介します。

インドを

好きになつて

法律学科3年 山本寛奈

自分が日本人であるという意識はあったが、同時にアジア人であるというのを忘れていた。そのせいか、私は過去に一度も日本以外のアジアの国に興味を持ったことがない。もちろん知識も乏しいし、むしろ欧米諸国のほうが詳しいともいえるだろう。現在の日本人の多くは、西洋文

化の中で生きている。気づけば、普段の生活で「ここは日本だ!」と物語っているものを目にするのはほとんどない。それが良いとか悪いとか、そんなことはどうでもよくて、どうやら私はそういった国の伝統文化に飢えているようだった。そこで私が興味を持った国がインドである。

先進国しか見たことのない私が、初めて途上国であるインドへ行った。日本の非営利団体「地球の友と歩む会」がインドのマハラシュトラ州で開催する2週間のスタディ・ツアー!

プログラムに参加したことだった。それは、NGO大国といわれるインドで、現地NGOを積極的に訪問し、活動や成果を学ぶことを目的としたツアーであった。また、インド人でもなかなか足を踏み入れない部族の村でのホームステイや、都会に住む大学生の家でのホームステイも体験

することができるとのことだった。なかなか興味深い内容のツアーだったので、私も参加しようと思ひ、大学のやる気応援奨学金に応募したのだ。自分のやる気だけで大学からの援助を受けることができるチャンスなどなかなかないので、今回のチャンスを活かしてみることにした。

うわさでしか聞いたことのないインドであったが、私はあえて知識を詰め込んでからインドへ行こうとは

思わなかった。すべて、その場で見て、聞いて、感じたことを素直に受け入れたかったからである。そういう面で、今回の旅で私は常に、驚きや喜びや悲しみと向かい合っていた。

まず私が体験したのは、都会からは車で5時間以上も離れたところにある、部族の村でのホームステイだった。日本人がその村へ訪問するのは初めてで、村人のほとんども日本人を始め東洋人と会うのは初めてだった。村人は、まるで私が動物園の檻の中のように周りを囲み、ずっと眺めてきた。しかし、私が少しでも子どもに手を振ると、子ど





もたちはとつきに隠れてしまうほどみんな恥かしがりやだった。みんながみんなそうなので、とてもかわいかった。

村は、日本での生活と比べてあまりにも原始的な生活様式であった。電気もほとんどなく、夜はガス灯で過ごしていた。水が出るのは朝だけで、水圧の弱い水場は村に一箇所しかない。トイレはなく、みんな自然の中だ。決して不便ではなかった。私としてはこの「フリースタイル」の生活を楽しむことができた。日本で自分がどれだけあらゆる「もの」に頼って生きていくか、がいたいほどわかった。

夜は、村の小さなお寺で毎晩交流

会が開かれた。村人のほとんど、特に女性や子どもは英語が話せなかった。マハラシュトラ州の言葉であるマラティー語が主流だ。私はマラティー語が話せないことがほとんどだった。しかし村人はそれでもたくさん話しかけてきた。もちろんマラティー語で。通じないことがわかっていても私はそれに対してなぜか日本語で答えていた。何回も同じことを繰り返したが、それが本当に楽しかった。もちろん、直接の会話で相手に気持ち伝えたいとも何回も思った。次はしっかりとマラティー語を学んで、もう一度あの村へ行きたいと思う。

インドには、本当にたくさんN GO 団体があった。私は、そのいくつかを訪問したが、どの団体も組織としてしっかりと基盤があり、目的にむかってその機能を果たしている強いものだった。日本ではなかなか見られないであろう。一つに、スラム街を管理する団体を訪問した。スラムとはいったい何なのだろうか。私が訪問した Dharavi というスラム街は、アジア最大規模である。人口

は70万人。人々は定住していて、とても団結している。学校も何校も設立されていて、日本の市町村よりも大きい街が「スラム」と呼ばれていた。一気に私のスラムに対する意識が覆されたのだ。密集地帯での生活なので、衛生面での心配が一番の問題点だが、職業などに関することは意外とあまり問題となっていなかった。

生まれて初めて孤児院へ行った。あんなにかわいい子どもたちを見たら、なぜ孤児が生まれてくるのだろうかなど、私には理解ができない。子どもたち一人一人がスキんシップを求めてきた。動物の本能である。愛情に飢えていた。初めて会った私にびたりと抱きついて、絶対に離れようとしないのだ。少しでも降ろす素振りを見せるとすぐに泣き出してしまふ。ほんの数時間しか一緒にいてあげることができないのに、この子たちに少しでも期待を持たせてしまふようなことをしてしまつた自分に怒りさえおぼえた。インドでの一番辛い体験だったと思う。

インドの都会は、貧富の差がとて

す子どもたちやその家族もあれば、大豪邸に住む人々やそここの団地で生活をしている人々もいる。路上で暮らす子どもたちはとても元気で明るかった。お金をせびることを覚えてしまったことをとてもつたいなく思った。きつと、彼らは彼らの生活以外を知らないからこんなに笑って生活をしていけるのだろう。だからもし我々が今彼らと同じ生活をした時に生まれる苦しみも、彼らには存在しないのだろう。同じ人間なのに、と思うと切ないが、それが彼らの人生なのだから私は決してかわいそうなどと思わない。

今回の旅で、私はたくさんの人と出会った。すべて出会いは、一生の出会いだと思っている。たとえもう二度と会うことがなくても、その時の出会いは一つの偶然であり、とても大切なものである。人と人のつながりには国境も何もないのだから。どの国にも存在する、その国で生まれ育つた者にしかかなかわからないこと、私はインドのそういった部分まで知り尽くしたい。インドを好きになって帰ってくるのができて本当に良かった。

アメリカの 裁判を実感して

国際企業関係法学科

3年 溝際英恵

2002年2月4日から五週間、Churchill County District Attorney's Office Nevada インタビュアーをさせていただきました。この体験を通して、実際に検事の仕事をみて今まで考えることなかったことを考え、自分の将来をもう一度考えなおすことができ、私にとって奥の深い一ヶ月でした。

Feb・4・2002 成田から



Fallon に向けて出発。テロの影響もあり検査にはかなりの時間要し、着いたのは夜中12時でした。

Feb・6 地方検事事務所でのインタビュアーとしての、初めての仕事の日。私が仕事を手伝わせていたのはDAであるMr. Malloryの秘書のSusie。毎日Susieにつきっきりで仕事をしました。今日は検事の一人であるTomについてDistrict Court(地方裁判所)にいき、傍聴席で裁判を見ました。

Feb・7 Churchill Countyの地域委員会の話し合いがあり、地域問題について法的解決のアドバイスをするという、地方検事の仕事のひとつのために地域委員会の話し合いに参加しました。議題は多岐に渡り、中には隣人の迷惑行為に関する条例を作るといふ問題があり、迷惑行為(例えば隣の犬が夜中に吠えてうるさくて眠れない場合)を行い、注意しても改善されない場合は、\$1000の罰金または6ヶ月の懲役または禁錮というものがありました。

Feb・11 裁判専門の新聞記者である、Marine からインタビュアーを受けました。日本の法システムの話や、

自分の将来の事、大学についてなど、たくさんのことを聞かれました。違う国の人に、自分の国のことや、法システムについて説明することは、理解しているつもりでもなかなか難しく、もっと勉強が必要だと実感しました。

Feb・12 Russelという検事は少年犯罪専門で、今日は彼と一緒にDistrict Courtにいきました。少年犯罪は一般、また新聞記者の方の立ち入りも禁止していますが、インタビュアーということで、特別に少年犯罪の裁判にも立ち合いを認めていただきました。

Feb・14 District Courtに行き、親権をめぐる裁判を傍聴しました。アメリカにおいて、信頼を計る物差しの一つとして、その人が仕事を持っているかどうかが問われます。今回も父親が仕事をしているかが問題になり、父親は相手の弁護士の質に憤慨して、裁判の途中であるのにもかかわらず退出してしまい、皆があっけにとられてしまいました。母親もドラッグをやっていたという事実もあってなかなか難しい、興味深い裁判でした。

Feb・23 host momのJoJoの妹のArianがパーティーを開いてくれました。私の好物だったものを覚えていてくれて、turkey, sweet potatoesといったアメリカならではの食事に懐かしさをおぼえました。やっぱり、アメリカの食事が大好きです。

Feb・27 Justice Courtで離婚裁判の傍聴をしました。この日に、Russelにいわれた言葉は、今でも心に残っています。

"Always be a good friend of the clerks and Judges. And always keep them happy. It makes your life easier."

Feb・28 今日は最後の日でした。DAの皆が内緒でCardを書いてくれて、それをもらったときには感動して涙がでそうでした。

このDAの事務所働いている検事たちは、それぞれが違った考え方をもって検事として働いていますが、彼らはみんな、困っている人を助けたい、そう思って働いています。彼らはみんな、検事として働き、本当に困っている人を助けるということに誇りにおもっており、そして検

事であることがとても幸せであるといっていました。

District Attorney である Art は次のことを必ず守っているそうです。

"We work for innocent people. Do not prosecute until you ARE totally convinced that person has done something should be prosecuted."

どんなに大変な仕事でも、どんなにストレスがたまるような時でも、困っている人を助けたいという、彼らの正義感で乗り越えているそうです。裁判所での検事たちは本当に Hero のようでした。

この DA's office で働くことができ、いろいろな人に会って、いろいろなことを教えていただき、本当によい経験ができました。検事としての仕事や裁判の流れというものを見ること



ができただけでなく、実際に事件や問題に直面している人たちにあり、彼らの人生を左右

する仕事をする裁判官、検事、弁護士の仕事の大きさ、大切さを肌で感じる事ができました。また、彼らに対する憧れというものは前にも増して、大きなものとなり、この世界の仕事により強い興味を抱くようになりました。

またほとんど毎日裁判所に同行させていただき、いろいろな種類の裁判を見学することができ、弁護することの難しさ、判決を下すことの重大さ、難しさというのを実感しました。当初の目標のひとつであった、法律の専門知識および、専門用語の習得は、この体験を通して、たくさん学ぶことができましたが、やはり、自分で学習することの大切さを実感しました。

DAの事務員としてIDカードを発行していただき、Juvenile cases (少年裁判) についても見学させていただけなのが印象深かったです。あたりまえのことかもしれませんが、裁判で、囚人服を着て、手錠をかけられている人が、自分の横に座っているとドキドキしました。

大変満足の行く体験をさせていただき、DAの事務所の方々、Host

mom の JoJo、Rod Maskew、そして中央大学の先生方皆さんに感謝しています。

裁判官の Mr. Estes とお話しする機会があり、次のことをいわれました。

私は、物理の先生をやっていて、35歳の時にどうしても法律の勉強がしたいと思ひ、家族や生活があったけれども、その年からロースクールに通い始め、裁判官になった。司法試験とはこの世の中にある資格試験で、最も難しいもののひとつであるけれども、司法試験が難しいのは、その覚えることがたくさんあって大変だから難しいだけではなく、受験者が色々な分野におけるエキスパートでなければならぬから、難しいのだ。

将来法曹になったとき、あなたが、裁判官、検察、弁護士、どの仕事につくかはわからないけれども、みんなが同じように持っている気持ちには、困っている人を助けるといふことです。そのとき、法律上の知識を並べただけでは、困っている人を助けることなんかできない。例えば、スポーツに関する訴訟では、スポーツに関

する知識が絶対に必要であるし、音楽についてもどうよのことがいえる。

そして、なによりも経験が必要である。勉強だけ、文章の上のことだけを頭につめこめば、司法試験に通るかもしれない、しかし、経験のない人に人を救えない。将来というのはずっと続くのだから、人生のどこで自分の本当にやりたいことを見つけて、進む道を変えたって遅いということはない。ただ、今のうちにできることをして経験を自分でおきなさい。そして、ひとつの物事を色々な視点から考えられる人になりなさい。

と言われました。今まで早く将来のことを決めて、早く就職したいと考えていた自分がなんだか、すごく小さい気がしました。Mr. Estesには自分の将来についてじっくりと考える機会を与えてもらった気がします。毎日の仕事を通して、彼らの仕事を学び、裁判官や検事の個人的な話を通して、人間性というものを学ぶことができました。短い間でしたが、とても意味のある、有意義な春休みでした。